東西道路　石積み遺構が橋台遺構であるとすると、橋台遺構上には東西方向にのびる道路の存在を想定できます。この道路の構造ですが、道路の側溝は確認できませんでした。

また、道路付近で造成土が確認されたものの、これについては、他の調査区での調査成果から、城下町の整備に伴う造成土である可能性が高く、道路の路面構築に伴う造成土とは現時点で確定できていません。

想定される道路の規模については、橋台遺構の石積み部分の幅が5mなので、この道路の幅もそれを最大幅とみることができます。

写真3　橋台遺構と想定される東西道路〔薄黄色部分〕（西から）

ちなみに、東西道路を東側に延長すると約50mで「本町筋」に接続し、西側に延長すると約50mで内堀にぶつかり、それを越えると内堀に囲まれた城内に入ります。つまり、この東西道路は、城下町のメインストリートである「本町筋」と城内とを接続する道路であったと考えられます。

城下町の変遷過程　検出遺構の重複関係等を検討した結果、城下町は、次のように三つの段階を経て変遷したと考えられます。各段階の特徴と、東西道路・橋台遺構の関わりについて述べます。

【第1段階】城下町域のかなり広い範囲にわたって造成が施され（昨年度調査の結果から想定）、城下町の整備が図られた段階。この段階の城下町の詳細な様相は、後世の削平の影響をうけて未確定ですが、南北溝は造成土の上から掘り込まれているので、この段階に南北溝が掘削され、東西道路の設置とともに、溝と道路の交差点に橋台を伴う橋が架設されたと考えられます。

【第2段階】第1段階の城下町の構成が大きく変化した段階。橋は撤去され、橋台も上半部が崩され、南北溝は人為的に埋められました。それに伴って東西道路は機能を失います。その後、埋められた南北溝付近一帯に複数棟の掘立柱建物が建設されました。

【第3段階】城下町廃絶後、付近一帯が水田化された段階。水田化にあたり大規模な削平が加えられました。

上記の三つの段階が文献史料にみられる佐和山城・城下町の変遷とどのように一致するのか、どの城主の段階の整備・改変に対応するのか、まだ十分に検討できていません。とくに、文献史料にみる石田三成による文禄5年（1596）の佐和山城「惣構御普請」が、第1段階・第2段階とどのように対応するのか、という点に課題を残しています。この課題については、今後隣接地点の調査結果も踏まえて検討していきたいと考えています。

まとめ

今回の調査の成果を箇条書きにまとめておきます。

①城下町域の調査により、従来知られていなかった南北溝と石積みによって築かれた橋台遺構とを検出し、橋台に架設された橋を通る東西道路の存在が推定されました。

②この東西道路は、城下町のメインストリートと推定される南北方向の「本町筋」と、内堀で囲まれた佐和山丘陵側の城内地区とを接続する城下町域でも重要な道路であると考えられます。

③これら東西道路・南北溝、橋台遺構は、城下町域全体が造成・整備された後に設置されたものですが、その後人為的に溝が埋め戻され、橋・道路も機能を失い、城下町の状況が大きく変化し、さらに城下町の廃絶後には付近一帯が水田化された、という遺構の変遷過程が判明しました。

④こうした遺構の変遷過程について、文献史料にみられる佐和山城・城下町の変遷とどのように一致するのか、どの城主の段階の整備・改変に対応するのか、という点が今後の課題となります。

佐和山城跡発掘調査現地説明会資料

令和元年（2019年）9月29日（日）／公益財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。

公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

遺跡の概要と調査の概要

遺跡の概要　佐和山城跡は彦根市北端に位置し、南北約4㎞にわたって連なる佐和山丘陵の中央部に所在します。東側では近世の朝鮮人街道（下街道）と近世中山道（東山道）の分岐点があり、西側には松原内湖・琵琶湖をひかえた水陸交通の要衝でした。約1.5㎞南西には特別史跡彦根城跡が位置しています。石田三成の居城として知られますが、その歴史は古く鎌倉時代に遡るとされています。戦国時代には江北の浅井氏と江南の六角氏との境目の城として抗争の最前線となりました。その後、城主は目まぐるしく替わりますが、石田三成が城主の際に城は最大規模になったと考えられています。関ヶ原の戦いで三成が敗れると、徳川家康の家臣・井伊直政が入城しますが、慶長9年(1604年)彦根城の築城に伴って廃城となりました。

調査の概要　佐和山城跡では、これまで彦根市教育委員会、滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会によって、城跡の各所において数次にわたる発掘調査が行われてきました。城跡は山上曲輪群・山麓曲輪群・城下町の３つの区域に大別されます。このたび、遺跡の範囲内において、国土交通省近畿地方整備局滋賀国道事務所により一般国道8号米原バイパス工事が計画されたため、それに先立ち城下町地区の発掘調査に平成30年度から着手し、本年度も調査を継続中です。調査の結果、城下町関連遺構を検出したほかそれらに伴って様々な遺物が出土しました。本年度の調査では、城下町域において、従来知られていなかった橋台遺構を検出したことにより、新たな道路の存在が想定され、城下町の様相を窺う手がかりが得られました。

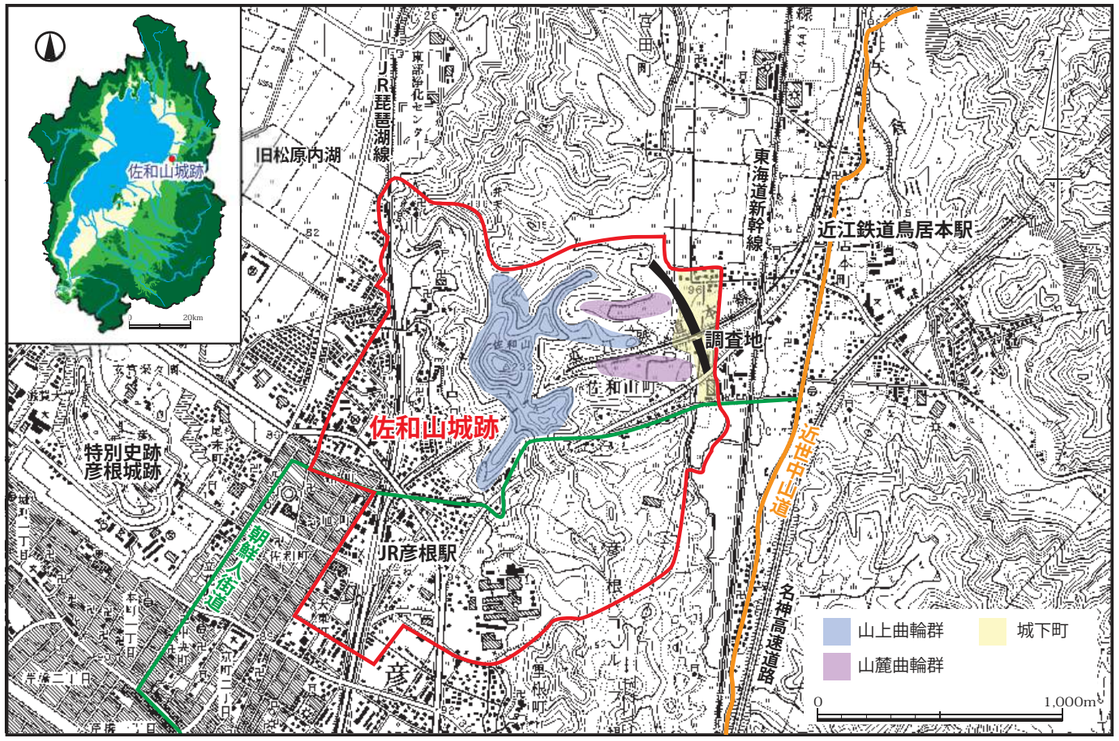


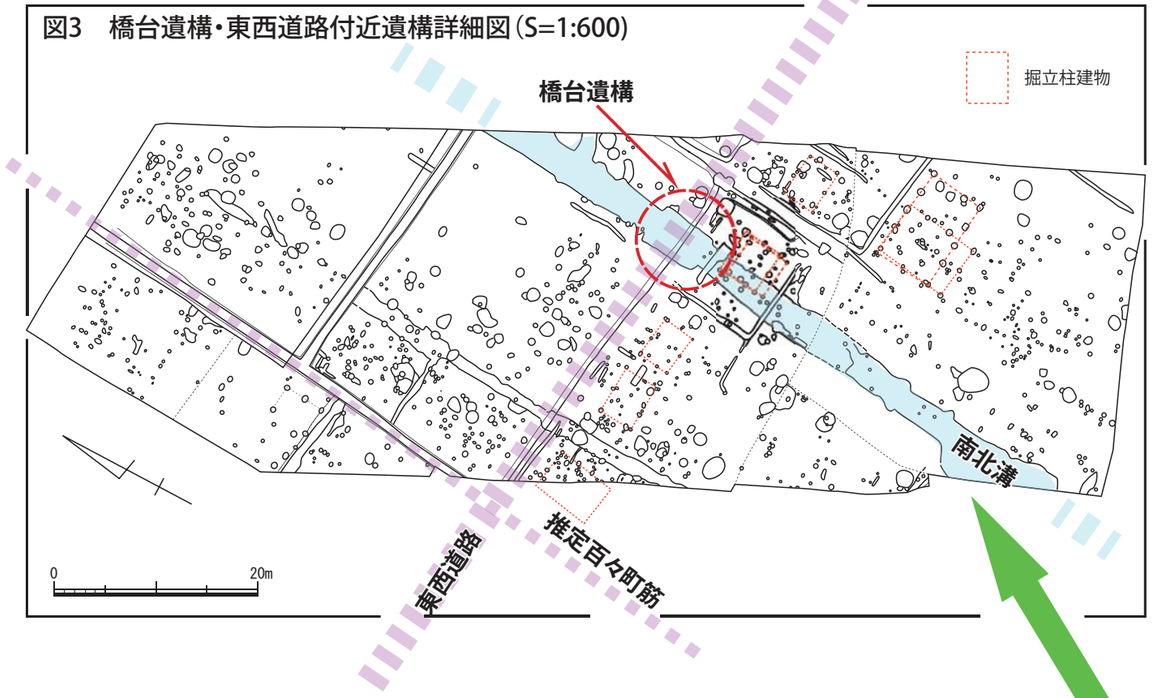
図1　佐和山城跡の範囲（赤枠）と今回の調査地点の位置（黒塗）

検出遺構・出土遺物

今年度は、城下町を南北に縦断し、メインストリートと推定されている「本町筋」から内堀にいたる間を中心に調査を実施しました。その結果、佐和山城に伴う内堀・土塁にくわえて、城下町に関係する掘立柱建物・井戸・溝・土坑・ピット等の諸遺構を検出しました。また、それらに伴って、陶磁器類・土器類（土師器等）・金属器類（銭貨・刀装具等）・木器類（漆器椀等）・石製品（石仏等）等の遺物が出土しました。出土遺物の時期は、おおむね16世紀末から17世紀初頭頃を中心とするものです。

橋台遺構と東西道路について　検出遺構のなかでも注目されるのは、橋台遺構と考えられる石積みと、そこから推定される東西方向の道路遺構（東西道路）です。以下、これらの詳細を説明します。

図3　橋台遺構・東西道路付近遺構詳細図（S=1:600）



橋台遺構　推定「本町筋」から西側へ約50mを隔てた調査区内において、幅2.6m程度の南北方向の溝を検出しました（南北溝）。この南北溝には、東西両岸の一部を約5mにわたって掘り広げ、その部分に石積みを施した部分がありました。

この石積みは、幅0.3～0.5m程度・高さ0.2～0.3m程度・奥行0.3～0.4m程度の石材を積み上げ、その背面に裏込めとして拳大から人頭大ほどの栗石（ぐりいし）を詰めていました。大半の石材は佐和山丘陵で産出するチャートです。また、石積みは、東西両岸から溝の内側へ向けて崩されていることがわかりました。さらに、全体にわたって後世の水田化に伴う削平も及んでおり、石材の大半が失われていて、最も残りの良い部分で2段分が遺存していました。とくに北半分は削平が著しく、東岸部の石積みは1段目のみが遺存し、西岸部ではすべて取り去られていました。このように、石組み上部の破壊や後世の削平によって、石積み上部にあったはずの本来の地面が失われたため、石積み上部の構造や本来の高さは判然としません。ただし、溝内部に落ち込んだ栗石・石材の量からみて、本来はもう1～2段分積み上げられていた可能性があります。

この石積みについては、①溝の一部のみに施工され、単なる護岸施設とは考えがたいこと、②石積みの東西両側には帯状に遺構があまり分布しない空間が続いており、それを道路の痕跡と想定できること、等の点からみて、東西方向の道路と南北方向の溝との交差点に設置された橋の橋台であると考えています。

写真1　橋台遺構と南北溝（北から）

写真2　橋台遺構東辺石積み詳細（西から）

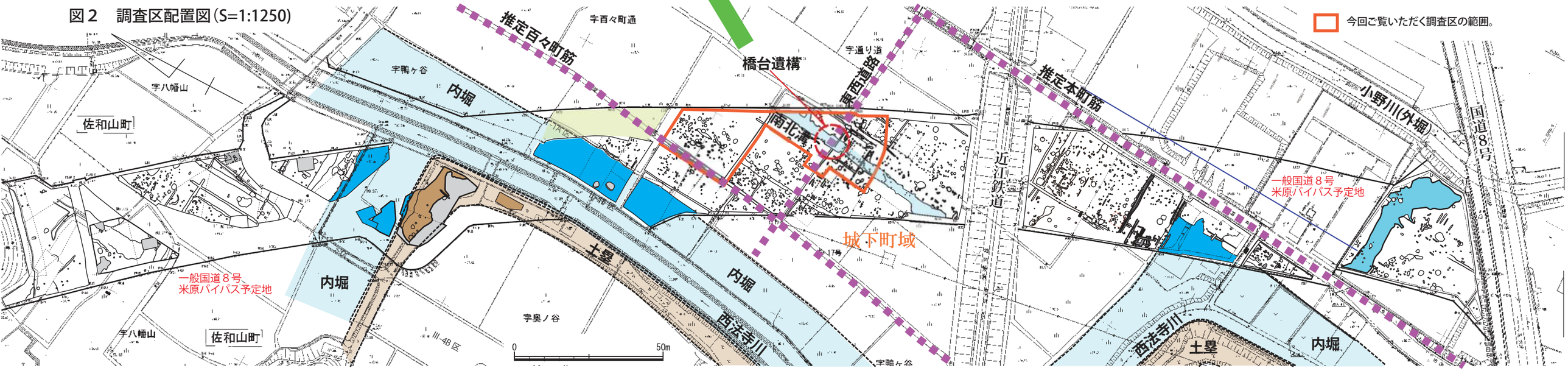



図2　調査区配置図（S=1:1250）